

マルコ 10 章 13～16 節「神の国を受け入れる」

この箇所が終わりに、主イエスが子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福されたとあります。主イエスの愛を知ると共に、この箇所はまた、子どもたちのことを通して主イエスが教えていることがあります。「子どものように神の国を受け入れる」ということです。

主イエスの招きには、応答して、従うことが求められます。同時に、そのような応答は自分の力で十分にできるのではなく、神の恵みによって導かれるのです。神の御子イエスを信じて救われた人は神の子どもとされたのです。神の恵みを感謝して、神との親しい関係を楽しみ、力を抜いて生きることができるのです。

1. 弟子たちの思い違い（：13）

主イエスの御許に子どもたちが連れて来られました。当時、著名なラビ、律法の教師の許に子どもたちを連れて行って、祝福してもらうことが一般的にありました。同じように、イエスに手を置いて祝福してもらいたいと願ったのでしょう。「イエスに触れていただく」と願っていたとあります。病人が癒やされたように、特別な力が働いて、祝福が与えられると思ったのでしょう。子どもたちのためを思う親の愛を感じます。

様々な偶像のところに子どもたちを連れて行く慣習があります。そのような神々は実際には存在しないのですから、生けるまことの神様のもとに連れて来て欲しいと思います。そのような中で子どもたちを連れて教会に集い、主イエス様のもとに連れて来る方々のために、私たちは祝福を祈り求めたいと思います。

ところが、弟子たちは彼らを叱りました。イエス様は様々なことで忙しくしているのだから、子どもたちのために割いている時間はない。子どもたちは騒がしくしてイエス様や自分たちの邪魔になる。だいたい、子どもたちはイエス様に相手をしてもらう存在ではない。止める理由を問えば、そんな答えが返ってきたのではないのでしょうか。当時は、子どもたちは取るに足りない存在と考えられていました。

さらに、「叱った」と訳されていることばは、主イエスが悪霊に向かって叱ったとか、ペテロに対して「下がれ、サタン」と叱ったときにも同じことばです。弟子たちが親子を厳しく叱ったことには、自分たちはイエスの周りで取り仕切っているという意識があったのでしょう。イエスに仕えている中で、権力をふりかざすようになっていました。9章には、弟子たちが自分たちの中で誰が一番偉いか論じ合っていたと記されています。

私たちにも他人事ではありません。救われた時には神の恵みに感謝して、主の前にも人々の前にもへりくだっていたと思います。けれども、信仰生活を続け、奉仕を続けていると、自分が取り仕切っているかのような言動になっていることがあります。自分では気づかなくても、周りから見ると分かります。神の恵みを分かち合うどころではありません。それを妨げてしまっています。

2. 主イエスの熱い思い（：14）

主イエスは弟子たちの態度を放っておかれませんか。14節。憤った主イエスの思いの一つは、御許に来た親子たちに対するあわれみです。弟子たちが叱ったことでその場に緊張が走ったでしょう。そのような中でイエスのことばと態度で慰められ、安心したことでしょう。小さき者、弱い者、無力な者を主はご自身のもとに招いてくださり、神の国はこのような者たちのものだと言われます。

イエスはご自分に対する不当な扱いには怒りませんでした。十字架の上でさえ、「父よ、彼らをお赦してください」と祈られました。しかし、誰かが不当な扱いを受ける時には怒られました。神のみこころが人の行いによって隠され、正しく表されない時には怒られました。それに比べて私たちはどうでしょうか。自分が不当に扱われると怒るのではないのでしょうか。

主イエスの憤りから分かるもう一つのこと、弟子たちを訓練する愛です。主イエスの弟子たちは恵みを分かち合う者であり、しもべとなって仕える者です。そうあるために、自らが主の恵みを受けとめ、恵みによって生かされていることが必要です。主イエスは弟子たちがそのように歩んで欲しいと期待し、訓練するのです。弟子たちが神の国の働き人として用いられて欲しいという熱い思いがあるのです。

3. 主の祝福を受ける者（：15～16）

主イエス様は子どもたちをご自身のもとに招くとともに、そのことを通して、弟子たちや周りの人々に大切

なことを教えています。それは「神の国を受け入れる」ということです。

「神の国」とは、この地上における一つの国家という意味ではないことは明らかです。「神の国」については、聖書全体から学ぶ必要があります。「神の国」について簡潔に三つのことを挙げたいと思います。

一つは、ことばの意味です。「国」ということばの元の意味は「支配」ということです。ですから、神の国とは、神様が支配しているところ、統治しているところです。

二つ目に、神の国はすでに来ているという面があります。イエス様は「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と宣べ伝えました。悔い改めて福音を信じることで、神の国に入ることができます。神の国は、福音を信じる者たちにすでに実現している神の支配、統治です。

そして三つ目に、神の国はやがて未来において完成するという面があります。この世の終わりの時にイエス・キリストが再臨され、神の国が完成します。キリストが再臨される時、人々は御前で二つに分けられ、一方の人たちは神の国に入ることができ、もう一方の人たちは永遠の火に入れられてしまいます。すべての悪の力は滅ぼされ、神様の支配が永遠に確立されます。永遠の神の国が完成するのです。

その「神の国」を受け入れる、「神の国」に入るとは、すなわち人が救われることです。ですから、とても大事なことです。子どものように神の国を受け入れる」とはどういうことでしょうか。

主イエスは決して「子どもっぽくなれ」とか、「子どものようにわがままでも良い」と言ったのではありません。あるいは、子どもには罪がないから、天国に行けると言ったのでもありません。また、子どもの姿を模範にするようにと言ったのでもないようです。

幼い子どもは親の愛を得ようと努力したり、親に良く思われようとしたりしません。親の愛の中で自然にふるまっています。親の愛と保護に依存しています。その意味では自分で自分を確立しようとはしません。自分の行いに拠り頼むことをしません。

ですから、子どものようにとは、何か子どもらしさを修練すること、つまり従順、素直さ、謙虚さの修練によって、神の国に入る条件が整うということではありません。資格ではないのです。言い換えると、自分は何者かであると思っている間は、神の国を受け入れることができないし、神の国に入ることができないのです。不思議なことに、神の国は入るに値しないと思う者が入れていただけるのです。

神の国に入るとは、神の恵みの保護に頼ることです。神の恵みによらなければ自分は生きられないことを自覚して、恵み深い神に信頼し、自分自身を委ねることです。子どもたちが保護者がいなければ生きられないように、恵み深い神の保護がなければ自分は生きられないと認めて、頼ることです。恵み深い神が保護者となってくださる、その安心に生きることです。

そのように教えて、主イエスは子どもたちを抱き、手を置いて祈り、祝福されました。主の愛が伝わってきます。主に抱かれている子どもたちはきっと嬉しかったでしょう。自分が受け入れられている、自分を大切なものとしてくださっていると感じたでしょう。力強く感じて、安心して出ていけると感じたでしょう。イエス様ありがとうございますと感謝が溢れたことでしょう。

私たちもこの子どもたちのように、主イエス様のところに来て、主の恵みに身を委ねて、主から祝福を受けたいと思うのではないのでしょうか。

15節。自分は子どものように無力であり、ふさわしくないけれども、神の恵みに頼りたいと、今思っている方はいませんか。そのように、恵み深い神様の守りに自分を委ねれば良いのです。

自分の力で頑張ろうとしているのでしょうか。自分を無力と認めたくないのでしょうか。いろいろなことを計算して心配になっているのでしょうか。この世の価値観に従って決めつけていることはないのでしょうか。そのようにして自分を神の恵みに委ねることを拒んでいないのでしょうか。そうではなく、恵み深い神に自分自身を委ねる時に、神の恵みによって生きることが分かるようになります。そして、悔い改めて福音を信じて、神の国に入ることができるのです。恵み深い神の守りに自分自身を委ねましょう。

すでに神の恵みに身を委ねている私たちは、その幸いや平安をさらに味わい、喜びと感謝を分かち合っていきたいと思います。